

特別展 日本建築の自画像 探究者たちのもの語り



(あいさつより)

われわれがよく聞く『日本建築』とは、何なのか？ そもそも、何が『日本的』なのか？

私たちが普段、何気なく口にする「日本」という言葉は、付け加えられる別の言葉を得て、具体的で限定されたイメージをもつようになります。日本列島、日本人、日本文化、日本語、日本史、日本美術、等々。しかし、これら全てを問い直すような質問「何が日本的なのか？」に出くわすと、我々の思考は立ち止まってしまいます。それは「あたり前」と思っていた枠組みに、疑問をさしはさまれるからであり、「日本建築」もそうした言葉の一つではないでしょうか。

建築における「日本的なもの」とされるものは、実に多様であり、少なくとも、西洋との関係で「日本的なもの」が強く意識され、そのあり方が問われ続けてきたこの150年間には、様々なイメージが示され、実践されてきました。また、そのような自覚的な問いを経なくても、日々の暮らしの積み重ねの中で紡ぎ出された具体的で個性的な姿があります。これら全てを「日本建築」という言葉でくろうとすればするほど、その内容は曖昧になるでしょう。

展示は、「日本建築」を取り巻くイメージを「自画像」として、建築史家・建築家・地域の人々、という三つの視点による複数のまなざしから内容を構成しています。

第一の自画像は、明治以降の近代化(西洋化)が進む中で、建築(史)家らが、日本的なアイデンティティを求めていった姿です。

第二の自画像は、建築家たちが獲得した「日本的」なイメージや「伝統」を踏まえ、新しい「日本的」な建築を創造していった姿を、実作や計画をもとに取り上げたものです。

第三の自画像では、「日本建築」が制作される場からのアプローチとして、地域の人々の日々の生活や風土の中から蓄積されてきた建築の姿を紹介します。

おそらく「日本的なるもの」に、正解はありません。しかし、「日本的なるもの」は、必ずそう主張できるだけの根拠を過去にもっている、あるいはもとうとしたことについて、それらをできるだけ一歩ひいたスタンスで複線的に眺めていただければ幸いです。